

膜シンポジウム2020報告

実行委員長 滋賀医科大学 寺田智祐

膜シンポジウム2020をオンラインにて、2020年11月12日（木）・13日（金）の2日間にわたり開催しました。166名の多くの参加者をお迎えし、口頭22演題、ポスター66演題、受賞講演1演題を発表していただきました。成功裏に終えることができましたことをご報告申し上げますとともに、ご参加いただきました皆様にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

当初、膜シンポジウム2020は、同日程で神戸大学百年記念館にて開催する予定でした。しかし、8月の時点で新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が終息せず、感染拡大防止のため現地開催からオンライン開催に変更することに決定しました。それから実行委員会を組織し、オンライン会議で膜シンポジウムの企画・運用について議論をしながら、様々な準備を進めてまいりました。最終的に、本シンポジウムでは、オンラインシステムとしてZoomを利用する「GOING VIRTUAL」を化学工学会からお借りし、コントロールセンターを早稲田大学に設置することとなりました。これらの準備に多大なご尽力をいただきました野村幹弘先生（芝浦工業大学）ならびに松方正彦先生（早稲田大学）には深謝申し上げます。

本シンポジウムのプログラム編成は、実行委員会の森田真也先生（滋賀医科大学）、中川敬三先生（神戸大学）、田中孝明先生（新潟大学）と私の4名で主に行い、初めてのオンライン開催でどのような形式にすればスムーズに発表を進めることができるのか思案を重ねました。口頭発表は、メインルーム（Room 1）にて1演題あたり発表15分・質疑応答5分で行い、1名の座長が2～3演題を担当しました。Zoomでの質疑応答において、質問がある参加者にはチャットで「質問あり」と入力してもらい、座長が質問者を指名したらマイクを使用して質問していただくという方式で行いました。また、年会で行う予定であった膜学研究奨励賞の受賞講演も、本シンポジウムで行っていただきました。ポスター発表では、例年のショートプレゼンを行わず、人工膜はRoom 1～3、生体膜・境界領域はRoom 4～5と5つのルームに分かれ、1演題あたり発表7分・質疑応答7分で行いました。ポスター発表に座長は設けず、コントロールセンターの学生補助員が進行役を務め、参加者から質問がある場合は、適宜マイクを使用して質問していただきました。学生による優秀なポスター発表を対象とする学生賞の審査についても、学生賞選考委員の皆様に行っていただきました。オンラインでのトラブルをできるだけ回避するため、発表者の皆様には、当日の発表時間前に接続チェックとしてZoomでのマイク・カメラ・画面共有の確認をしていただきました。おかげさまで、2日間を通じて大きなトラブルもなくスムーズにシンポジウムを進めることができ、ご協力いただきました発表者・座長・実行委員・学生賞選考委員・学生補助員の皆様ならびに膜学会事

務局の渡部恭吉様には改めて感謝申し上げます。

今回の膜シンポジウムの主題は、オンライン開催が決定する以前より「ブレイクスルー」としていました。人工膜・生体膜・境界領域における様々な分野の研究者が垣根を越えて深く交流することで、各々の視点から新たな「ブレイクスルー」を見出し、膜学のさらなる発展に寄与することを目的としました。オンライン開催に変更となりましたが、膜に関連する幅広いカテゴリーに属する研究者・技術者が意見を交換し合い、膜学を新たなステージへと押し上げる突破口についての議論を行う場にできたのではないかと考えています。

最後にオンライン表彰式としてコントロールセンターの後藤雅宏会長より膜学研究奨励賞・膜誌論文賞・学生賞の各受賞者に賞状が授与され、後藤会長の言葉でシンポジウムの幕を閉じました。次回の年会は第43回、膜シンポジウムは第33回となります。まだまだ、新型コロナウイルス感染症の動向について先が見通せませんが、現地あるいはオンラインで「ブレイクスルー」を生み出すような議論ができることを期待しています。

実行委員会

実行委員長：寺田智祐（滋賀医科大学）

実行副委員長：田中孝明（新潟大学）

実行委員：赤松憲樹（工学院大学）、池田義人（神戸薬科大学）、大橋秀伯（東京農工大学）、兼橋真二（東京農工大学）、中川敬三（神戸大学）、中瀬生彦（大阪府立大学）、野村幹弘（芝浦工業大学）、松方正彦（早稲田大学）、森田真也（滋賀医科大学）、由利龍嗣（滋賀医科大学）



コントロールセンター (1)



コントロールセンター (2)



膜学研究奨励賞・膜誌論文賞・学生賞表彰式